

# 豊かさ・貧しさの 尺度を考える

兪 老 児

昨年秋、ジャイカ（国際協力事業団）の依頼で中・東欧（ブルガリア、ルーマニア、アルバニアなど）からの研修員八名の方々に北海道農業のことをお話しする機会がありました。

約一時間半の話題提供のあと、意見交換ということになりました。その開口一番、モルドバの男性から「あなたの話では、近年、北海道農業を取り巻く環境が悪化し、地域や農業経営は厳しい経済状況を余儀なくされているとのことであつたが、来日以来私たちが、視察したり統計データを見る限りでは経済的に苦境に陥っているようには思えない。その点についての所感を聞きたい」という質問がありました。

この質問をしている時、他の七名の方も同感だということにうなずいておりましたので共通の認識だったのでしよう。私は一瞬、言葉に詰まりましたが、「厳しさの尺度（評価の基準）は、日本や北海道の今までの発展過程を踏まえて相対的に用いているので、皆様のお国での状況と比較すると奇異に聞こえたかも知れない。それと表面的には豊かなように見えても、地方財政の実態などのように実質的には破綻の危機に面しているところも多い」と答えましたが、十分な納得が得られたと

は感じられませんでした。

長期にわたる経済不振や今や経済大国となった中国、東アジア諸国の猛追を受け、自信喪失気味の日本であっても、開発途上国の人々の目には、「経済大国ニッポン」のイメージが焼き付いているのでしょう。私の話題提供の中でも無意識のうちに、日本、北海道の農業なり、生活の水準が「国際基準Ⅱグローバルスタンダード」のように表現していたのではと苦い思いにとらわれました。

ご承知のように中・東欧の諸国は、ソ連を盟主とする社会主義体制の経済から自由主義・市場経済体制へ移行したのですが、比較的狭小な国土、資源の少なさ、さらにはボスニア等での民族紛争の影響があいまって経済基盤の確立が遅れ、どうやって先進諸国に追いつくかということで苦闘している地域です。



そのことを考慮すると、この八名の方々の思いは極めて重い意味をもっています。異なった国同士の相互理解の難しさを実感させられました。

ましてや、より極限的な状況にあるアフリカのスーダン難民やインド洋沿岸諸国を襲った巨大津波によって発生した数十万人を超える難民を抱えた地域を考える時、「貧しさ」の相対尺度以前の、生存の最低条件を満たす「衣食住」確保が根源的な課題となっていることを痛感させられました。日本や北海道が直面している様々な局面を考える時、脳裡に刻み込んでおくべきことではないでしょうか。



マザーテレサの次の言葉を思い起こしました。

「私たちは必要としているところに、その必要とされているものを届けることを使命としています。飢えている人々には食べ物を。病んでいる人々には癒しを。恐れている人々には平和と平安を。死に行く人々には尊厳を。豊かに見える日本にもこれらを必要とする人々が多いと私には思えます」。